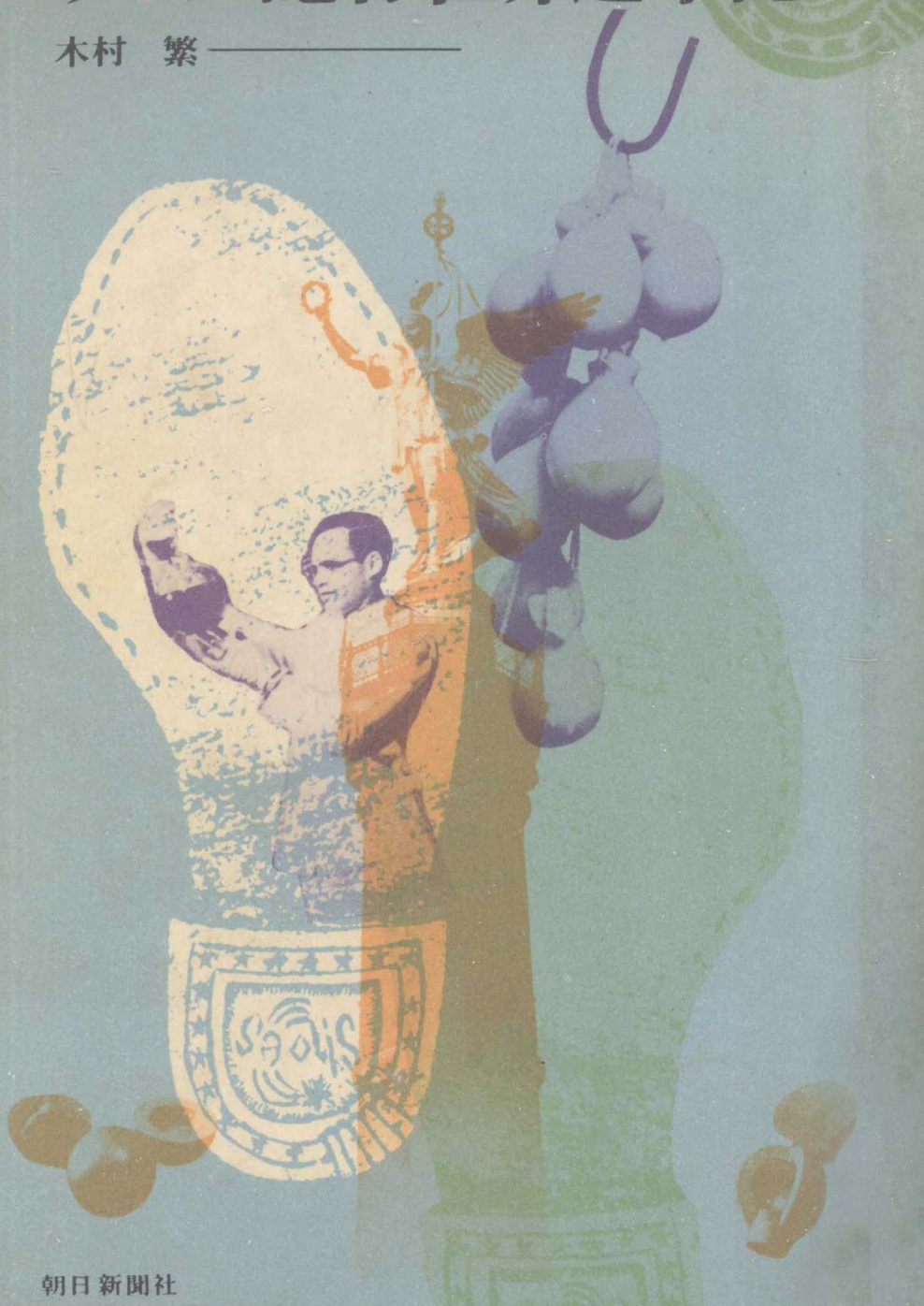


アトム記者世界道中記

木村 繁



トム記者世界道中記

木
村

繁

朝日新聞社刊

木村 繁（きむら・しげる）

1932年熊本市生れ。東大教養学部教養学科
科学史および科学哲学分科卒業。55年朝日
新聞東京本社に入る。水戸支局員を経て59
年東京本社科学部員となる。著書「原子力
の豆知識」「東海林村」（共著）「筑波山」

アトム記者世界道中記

定価／360円

昭和40年7月20日／第1刷発行

著者／木村繁

発行者／浜名二正

印刷所／大日本印刷

発行所／東京 名古屋 北九州／朝日新聞社
大阪

© 木村繁／1965年

アトム記者世界道中記／目次

氷だらけの北極越えて

7

ソフトで出発……非礼な水鉄砲……ナプキン論考
一日の損と得……平面的な氷野……朝のお遊び町
スイフノモノ

紳士だらけのイギリス

30

霧のロンドン……バイバー英語……昼間からお酒
練炭のお化け……ゼントルメン……カレッジ探検
バトカー停車……ブルカン拝見……消毒法の革命
書店と博物館……名刺のゆくえ

廃虚だらけのイタリヤ

74

強い南の陽光……急性廃虚ボケ……悲劇の大噴火
ゼロ年の科学……ノー・カメラ……敵もサルもの
ジャボネーゼ……ネコにも勲章

美女だらけの二つの町

109

超特大の大砲……美女とナマ肉……障害のシキイ

肉屋の店先で……アトムの首都……あわれな男性
ウィーンの森

戦跡だらけの二つの国

133

ベルリンの壁……戦争記念公園……西欧の飾り窓
ラインのぼり……孤独を愛して……あすのタドン
欧州の共同体……古戦場を走る

栄光だらけのフランス

167

自力で登る山……スズランの日……モンマルトル
毒殺説の実証……自家用車の女……文化と非文化
トゥールの町……コンクリたる……デンデナムシ
花のサクレー……パリの上半身

未来だらけのアメリカ

215

新世界に飛ぶ……テンポは二倍……大きなアワ箱
人殺し原子炉……ユニスフェア……豪華な未来凶
化学のショー……最新ロボット……びんづめ太陽

アトムだらけの一週間

257

首都のホテル……毒薬のラベル……人工の森の都
雲中盲目飛行……海中のアトム……ヤードで飲む
都会の原子炉……海賊の料理屋

愉快だらけの旅の終章

292

ニジかける滝……風来坊のY君……電気かんづめ
魔法のかまど……処男あやうし……変な送別映画
アトムの遺跡

あとがき

装　　幀／中浜光男
本文図版／吉沢家久

アトム記者世界道中記

氷だらけの北極越えて

ソフトで出発

東京は冷たい雨。二、三日前からのバカ陽気もどこへやら、シンと底冷えのする寒さだ。桜の花びらが、無残にもアスファルトの黒い路面で濡れている。

四月十日夜八時すぎ、わたしは、東京・羽田の国際空港に着く。

仲間のヤジさん、キタさん、スケさん、カクさんらが、すでに顔をそろえている。「カクさん」とか「スケさん」とか、いとも気安い呼名だが、これはわたしが、心ひそかに準備したアダ名である。もちろん、旅行中も、このアダ名を口にしたことはない。自分だけで「ははあ、ヤジさん、やりおるわい」とか「キタさん、あいかわらずだな」とか、心臓の左心室の、それも、ひどく奥まったところで、ひそかに、ニタニタしてただけである。

その「秘密のアダ名」を、ここで公開するのは、決してダテや酔狂ではない。この旅行のてんまつを、本名で書いたりしたら「プライバシーの侵害」とか「名誉棄損」とかで訴えられて、わたしは、多額の賠償金を払わなければならない。たいてい売れもしない（と予想される）この本の印税でその賠償金を支払うことは、おそらく不可能だろう。だから「ヤジさん」「キタさん」でゆくほかないのである。

わたしがつけたこのアダ名は、いささか、ふざけているが、実をいうと、わたしたちは「欧米原子力事情視察記者団」という、バカでかい看板を背負って、旅に出たのである。日本新聞協会と原子力産業会議のキモいりで編成された、この取材チームのメンバーは、つぎの十二人だ。

滝川 憲三	岐阜日日新聞編集局長（団長）
青園謙三郎	福井新聞編集局長
原 総一郎	信濃毎日新聞整理部長
石橋 一郎	サンケイ新聞社会部員
石井 恂	読売新聞東京本社科学部員
石川 欽也	毎日新聞東京本社科学部員
木村 繁	朝日新聞東京本社科学部員
北村 義朗	中部日本新聞東京支社科学部長

松尾 博 徳島新聞報道部次長

村野 賢哉 日本放送協会科学産業部長

奥地 幹雄 共同通信社科学部員

植松 邦彦 日本原子力産業会議嘱託

どのアダ名が、どの人に対応するかを「解説」すること
は、アインシュタインなみの秀才にも、きわめてむずかし
いだろう。だから、むだな骨折りをなさらぬよう、とくに
団員の奥さまがたや、知人友人のかたがたに、ご忠告申し
上げたい。

それはともかく、わたしたちは、すぐ荷物の重さをはか
り、切符の手続きをすませて、空港二階の特別室にあがる。
午後九時半、一同乾杯。見送りの人たちから壮行のことば
などを受けて旅行者入口へ。

税関も出国手続きも、一、二分の簡単なものだ。

「いまは、うるさくなつてね。日本のお金をかくし持って
出国するヤツがいるので、税関で、身体検査をやるそう
だ」

そんな、まことしやかな話をして、ただでさえ、おどお
どしている初心の旅行者を縮みあがらせて喜ぶ手合もいる。
わたしも、

「身体検査をやるらしいよ」

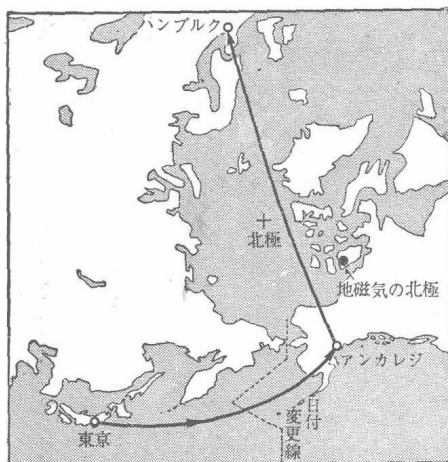
と、親切にささやかれたが、日本円など、つね日ごろから
エンの薄いほうだから、すこしも気にしない。税関でも、
「日本円をお持ちですか」

「ええ、千五百円ぐらい……」

——それでおしまいだ。旅券にボンとスタンプを押して
くれるが、それには「本邦通貨は本邦以外の地域において
は、船舶または航空機以外の場所では使用しないこと。本
邦通貨の未使用額は、必ず本邦へ持帰ること。許可金額×
××円」とある。わたしの許可金額は千五百円だ。わたし
は、その千五百円を後生大事にポケットにしまいこみ、そ
っくりそのまま「本邦」へ持帰った。もともと、外国で日
本円などには必要ないのだが、悪がしい旅行者たちは、最
高許可金額の二万円をはるかに越える、大量の聖徳太子や
伊藤博文を胴巻のなかに忍ばせて、スイスで時計を、オラ
ンダでダイヤを……と、金目の品を、日本円で買いあさる
のだそうである。だから、ときどき身体検査のデマぐらい
は飛ばさないと、とても日本の経済がもたないという話だ。
だが、そんなことはどうでもいい。もともと、わたしに
はエンのない話だ。わたしたちは、いま二つの関所を越え
て、国外への第一歩を踏出したのである。待合室は、もう
国内の人たちとは隔離されていて、ここには、刑務所の面
会所みたいな窓がある。プラスチックの円板に、小さな穴

をたくさんあけた窓で、音波だけが、かろうじて、通過できる仕組みになっている。

わたしは、その窓ごしに妻と別れを惜しむ。たった二カ月ばかりの海外旅行に「別れを惜しむ」という表現は大げさだ。わたし自身、それはよくわかつているのだが、別れを惜しんだぐらいのことは書いておかないと、ママのカミさまに對する不敬の罪で、飛行機墜落の罰を食いかねない。搭乗口から飛行機に向う。どこのカメラマンか知らないが、わたしたち団員を飛行機の前に整列させて、パッパッ



と、はでにフラッシュをたく。雨のなかで、いい迷惑だ。「飛行機が落ちたときの準備かね」と、ツルさんがぼやく。新聞社というところは、

万事、手回しがよい。死にそうな人の写真や略歴などは、ちゃんと、あらかじめ準備しておいて、死亡と同時に新聞にのせる。もちろん、わたしののようなチンピラは、その対象にはならないが、わたしたちの視察団には、編集局長がふたりもいるから、写真をとっておく値打ちは十分なのである。

あとで聞いたのだが、このカメラマンは共同通信社の人だったという。共同通信社は、全国の地方新聞社の代理店みたいなもので、それぞれの新聞社にかわって、記事や写真の取材にあたっている。おそらく、岐阜日日新聞や福井新聞などの十一日づけ朝刊には、われわれの写真が大きく掲載され、「中央が本社編集局長」といったような絵とき(写真説明)がつけられたことだろう。

わたしは、その写真を見ていないが、おそらく、十二人の団員のなかでは、わたしが、いちばん目につくはずである。わたしは、自信を持って、そういう切ることができる。それは、わたしが最年少で、少しばかりハンサムだから、というわけでは、決してない。わたしだけが、いとも上品なソフト帽を、オツにすましてかぶっているからである。

以前ドイツに旅した弟が、あちらで買ってかぶったソフトを、

「兄上、どうぞ」

と、献呈してくれたので、それをかぶって羽田の空港に行ったのである。

わたしは、小学生みたいな、若々しい顔をしているから、ソフトをかぶった「英姿」は、いわゆる「ポッチャントッチャン」で、こどもとも、おとなともつかぬ珍妙な感じに違いない。

だが、外遊経験者の弟が、ぜひにと強要したし、わたしもよく考え実用的な効果をねらって、あえてかぶることにしたのだから、かっこうの珍妙さは、がまんするほかない。その効果の第一は、おとなのシンボルとしてである。

欧米に出ると、日本人は背が低いから、しばしば、こどもとまちがわれる。実際、おん年五十のモモさんでさえ、米国はボストンのホテルで、受付のうら若い女性から、

「ヘイ、ボーイ」

と、やられて、大いにくさったり、喜んだりしたほどだから、わたしなどは、さしづめ、

「ハロー、ベビー」

と、やられるところである。ソフトをかぶっていれば、まさか、こどもとは思わないだろう。

第二の効用は、雨よけである。ソフトにビニールのカバーをかぶせれば、レインハットとして役立つ。事実、ロン

ドンでは、しばしば雨に見舞われたが、レインコートとソフトのおかげで、雨のなかを、なんの苦もなくカサなしで歩くことができた。

非礼な水鉄砲

フラッシュの洗礼を十分あびて、わたしたち団員は、飛行機に乗込む。ボーイング七〇七インターコンチネンタルというジェット機で、エール・フランス（フランス航空）の所属である。

さいわい、わたしに指定された座席は、主翼のややうしろの窓ぎわである。

さっそく、さげカバンのなかから、小さな双眼鏡を取出して、見送りの人たちを観察する。だが、残念なことに、見送りの人たちは、黒いシルエットになっていて、顔を見分けることができない。というのは、見送り客の頭上に大きな照明灯があつて、飛行機のほうを照らしているからだ。その光がまぶしくてダメなのである。

実をいうと、わたしは、妻の顔をもう一度みたいのだ。まさか、妻がアカンペーやヒョットコづらをしているはずはないと思うが、宿六を見送るヤマのカミの表情たるや、いかなるものであるか、いささか興味がある。だが、表情

はおろか、それが妻であるかさえ、さだかでない。

やがて、わたしたちの乗機は、エンジンをつかし、滑走路に向って動きはじめる。

離陸はスムーズで、飛行機はまもなく雲の上に出たはずだが、機内灯が明るすぎて、窓の外は、ただ、真暗にしか見えない。

しかたがないので、座席の前のポケットに手を伸ばして、パンフレットを取出す。フランスの飛行機なのに、六つあるパンフレットのうち五つまで日本語で書いてある。

なかに「歓迎、エール・フランス」と題するパンフレットがあり、開いてみると「ヨーロッパ旅行を日本語で……」と書いてある。欧州の主要都市に二十二人の日本人社員を配置して、エール・フランスは、サービスにこれとめていっている趣旨だ。そして、各都市の連絡先と、日本人社員の名前、写真などが印刷してある。たとえば、こうである。

「日本人社員の席は、正面玄関をはいりますと、右側のカウンターのうしろにあります。ジャボネとおっしゃれば、ホステスがお案内いたします。……ご遠慮なくお立寄り下さる」

——たとえば、パリの目抜き通りシャンゼリゼーで、オシッコがしたくなったとき、あるいは、ふんどしのヒモが

切れて処置に困ったとき、ホテルのお風呂のお湯が熱すぎるとき、かわいいパリっ子にまといつかれて弱ったとき……、まずエール・フランスの事務所にとびこんで、

「ジャボネ、ジャボネ」

と、絶叫すべきである。もつと、もつと、ひどい難題を抱込むジャボネ紳士もあるそうだから、ここに並べたくらいのことなら、すこしも遠慮することはない。まったく、世界は便利になったものだ。

もちろん、機内のアナウンスも日本語併用だ。英独仏日の四カ国語でペラペラやるのだが、フランス語と日本語は、たしかにうまい。しかし、ドイツ語と英語は、しろうとの耳にも、ヘタだとわかる。なぜかというところ、この飛行機には、フランス人と日本人のスチュワーデスしか乗っていないからである。

「ハンブルクにご到着のお時間は……」
というところを、英語とドイツ語では、

「アンブルクにご到着の……」

とやる。フランス語には、英語のエッチにあたる発音がないから、ハとはいえないのである。

ともかく、飛行機のなかでは、万事、日本語で片がつくから、気楽なものだと、のんびり構えていると、どっこい、フランス語の素養をテストされるような事態が、まもなく

到来する。

最初は食事である。離陸後一時間もたないうちに、夜食がサーブされるが、卵の蒸し煮、コールド・ミート、アスパラガス・サラダなどという、結構な料理のほかに、ピンクに塗った美しいカン詰が、ひとつついている。フランス語の素養がないと、

「さて、このカンのなかみは……」

と、首を二、三回ひねって、

「ままよ、あけてみるか」

と、おっかなびっくり、付属のカンキリを突きたてた瞬間、シューッと一発、ものすごい水鉄砲のパンチをくらうはずである。

さいわい、わたしは、生後三カ月のフランス産ベビーほどの「素養」があるから、

「こいつは、あぶないぞ」

と、いち早く危険を察したが、敵をあまくみて、十分な対抗手段をとらなかつたので、顔のまんなかを、まともにやられる。となりの席のキタさんも、そのとなりのツルさんも、例外なく水鉄砲の犠牲者だ。

これは、飲料水のカン詰なのだ。フランス語の素養があれば「オー・ミネラル・ナチュレール」と書いてあるのがわかるはずだし、科学の素養があれば、気圧の差で、なか

の水が、いきおいよく噴出する危険を予測できるはずである。

このことについては、少し説明しないと、

「この記者は、なんてまあ、不親切なんでしょう」

と、せっかくの女性の読者に、あいそをつかさねるだろう。話は、いささか、むずかしいが、あえて説明を試みよう。

機内のアナウンスによれば、飛行機は高度一万一千メートルの成層圏を飛んでいる。これは、世界の最高峰エベレストより二千メートル以上も高く、ここらには、もう空気はわずかしかない。もし、アホウな客がいて、よいこらしよと、窓などあけようものなら、わたしたちは、たちまち窒息して昇天するだろう。だから、この飛行機の窓は、厳重に密閉しており、機内で夫婦げんかをおっ始めて、持参のスリコギや電気アイロンなどを投げつけても、窓ガラスは、おいそれと、われないようにできている。そして、機内の空気は、高級なエア・コンで、きちんと調整してある。この調整の基準が、地上の空気と同じであれば、わたしはなにも水鉄砲をくらうことはない。だが、実をいうと、機内の空気は、地上二千メートルの状態に調整されているのだ。

二千メートルといえば、遭難名所の谷川岳と同じくらいの高さだ。空気は地上より薄く、気圧も低い。

飛行機的设计者たちは、なぜ、そんなケチなことをするのだろうか。どうせ調整するのなら、わずかばかりの空気をケチらずに、地上と同じ状態にしたらよいではないか、とだれでも思うだろう。

だが、それをあえて二千メートルにするだけの理由は、ちゃんとあるのだ。高度一万一千メートルを飛行中のジェット機は、たとえていえば、はりつめたゴムまりみたいなものである。外は気圧が低く、機内は気圧が高い。この気圧の差のため、胴体の壁にも、窓ガラスにも、相当な負担がかかっている。英国のコメット機が、はじめのうち、よく落ちたのは、この負担が積重なって、胴体がはり裂けたからである。

だから、飛行機的设计家たちは、ゴムまりのなかの空気を、できるだけ少なくしようと考える。お客さんから文句が出ない程度で、しかもできるだけ少なく……、その妥協点が、谷川岳の頂上なのである。

一方、ピンクの水カンは地上で作られ、カンのなかは、地上と同じ気圧である。機内の空気の圧力より、カンのなかの圧力がいくらか高い。これも、一つのゴムまりだ。穴をあければ、まりのなかから空気がふき出すのと同じことで、カンに穴をあけると、なかの水が噴出するのである。

といっても、噴出するのは、ごくわずかの水で、大部分

は、わたしの胃袋に落ちつく。

日本なら、どこでも飲めるふつうの水である。

旅立ちにあたって、まず水鉄砲とは、非礼な仕打ちだが、女性のヒジ鉄砲よりマシだから、がまんするとしよう。

ナブキン論考

日本時間の午前零時ごろ、夜食を終る。きれいなスチュワードスに、ひざかけ毛布を掛けてもらって、座席の背をたおす。機内の照明も弱められ、各席の読書灯も、つぎつぎに消されてゆく。

出発前の数日、仕事のひきつぎや、旅のしたくなどで、ひどい睡眠不足が続いていたので、わたしは、すぐに眠りに落ちる。

しかし、それは一時間と続かず、日本時間の午前一時すぎ、目がさめる。機内は、うす暗く、まわりの人たちは、軽い寝息をたてている。ふと窓の外をみると、そこには、あざやかな星空がある。北斗七星が美しく、北極星は東京で見えるよりも仰角が高い。乗機が北上した証拠である。飛行時間から推定すると、カムチャツカの南を飛んでいるはずだ。

翼の、赤い標識灯が、ピカール、ポカールと点滅して、

銀白色の翼面を照らす。火事の夜空を見るような、無気味で美しい色合いだ。

そのころから、わたしの胃腸は、異変を告げはじめる。わたしの医学的知識をもって判断すれば、これは、気圧低下の結果に違いない。水鉄砲の首謀者である「高度二千米ートル」が、またも、いたずらを始めたのだ。

胃腸がふくれ上がって、肺と心臓を圧迫している感じなのだ。わたしは、まずバンドをゆるめる。地上で胃腸内に仕込んでおいた、ある種の気体が、機内の気圧低下のため膨張したのに違いない。わたしは、しばらく、がまんするが、胃壁と腸壁は、ひき続き、苦情を訴える。ほうっておいたら、怒ったカエルかフグのおなかみたいにふくれあがって、まもなくパンクするかもしれない。

座席に腰をおろしたまま、この気体を解放してやってもいいのだが、もともと、だれかにごちそうしようと思っ仕込んでおいたわけでもないし、それに、となりのキタさん、ツルさんは、さきほど水鉄砲をくらったばかりだから、引き続き別の鉄砲をお見舞いするのは、あまりに気の毒だ。だから、わたしは座席をたって、後尾のトイレットへ向う。

こちんまりした、感じのいい腰かけ式の水洗便所で、洗面所もかねている。

「なるほど、狭い空間を、うまく利用しているものだ」

と、感心しながら、わたしは、祝砲をぶっぱなす。生れてはじめての海外旅行を祝う号砲としては、いささかお粗末だが、ほかの大砲をうつわけにはゆかないので、やむをえない。祝砲は天地をどろかすような大音響を発し、わたしの自尊心を十分に満足させてくれるが、感覚生理学的には、なんの刺激もない。それは、明らかに空砲だ。

たぶん、地上で仕込んだ「空気」であって、わが体内で発生した「ガス」ではなかったであろう。

しみじみとした解放感を味わいながら、わたしは、便所のなかの科学的な観察に移る。説明文は、すべてフランス語と英語で書いてある。上がフランス語、下が英語だから、どうしても、フランス語のほうを先に読むことになる。まず、便器の前の注意書を読み、わたしは、思わずどなる。

「おふざけじゃないよ」

わたしのささやかなフランス語の素養によれば、そこには、こう書いてあるのだ。

「便器のなかに、サックや布ぎれなどを捨てないで下さい」

フランス人はスケベだと、聞いてはいたが、これほどだとは思わなかった。飛行機のなかでサックとは、とんでもない話だ、とカンカンに怒りながら、下の英文に目を落とすと、そこには、こう書いてある。